

(財)北九州市芸術文化振興財団
委託調査

北九州芸術劇場
事業評価調査
[報告書]

2

2005年3月
ニッセイ基礎研究所

北九州芸術劇場
事業評価調査
[本編]

第1章 2004年度事業の概要と実績

本章ではまず、昨年度調査と同様、事業評価の基本となる北九州芸術劇場の事業の概要、入場者数や稼働率、収支状況など、2004年度の事業の実績について、2003年度との比較を含めて整理した。

1. 事業の実績

まず、北九州芸術劇場の事業の基本方針と2004年度の事業概要は次のとおりである。

(1) 事業の基本方針

北九州芸術劇場では、「創る」「育つ」「観る」をキーワードにした事業展開が行われている。それぞれの目的や考え方、事業の内容は次のとおりである。

- **【創る】**: 北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していく。
- **【育つ】**: アーティストを小・中学校に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指す。
- **【観る】**: 見る楽しみを知ってもらうため、舞台芸術の先進都市からエンターテインメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供する。

(2) 事業の内容と実績、入場者数

こうしたコンセプトに基づき、2004年度には次のような事業が実施された。

まず、「創る」に対応した創造事業では、「わたしの青い鳥」、「冒険王」、「シアターラボ2005-地蔵さんが転んだ」、「ルル〜破滅の微笑み〜」の4本の公演事業を行い、そのうち、「ルル〜破滅の微笑み〜」は、世田谷パブリックシアター、まつもと市民芸術館でも「北九州芸術劇場プロデュース公演」が行われている。

図表1-1 事業実績の概要(2003年度、2004年度)

	2003年度			2004年度		
	事業数	公演数・回数	入場者・参加者数	事業数	公演数・回数	入場者・参加者数
創造事業	3	15	4,748	4	15	3,292
公演事業	16	37	22,359	23	46	26,361
共催・提携事業	4	6	7,102	6	15	6,211
オープニング企画	2	2	1,592	—	—	—
演劇祭	2	9	987	2	9	1,231
計	27	69	36,788	35	85	37,095
	総席数	入場率	総席数	入場率		
公演事業	41,716	88.2%	41,808	88.7%		
学芸事業	—	219	2,402	—	320	4,734
総合計	27	288	39,190	35	405	41,829

注) 創造事業には、北九州芸術劇場以外の公演回数、入場者数は含まれていない。

「育つ」に対応した学芸事業では、表現教育推進事業、劇場塾(アーツマネジメント、戯曲講座、俳優講座等)、演劇やダンスのワークショップ、バックステージツアーなどに加え、「わたしの青い鳥」や「冒険王」などで、創造参加が行われるなど、昨年度にも増して幅広い事業が積極的に実施され、年間で、延べ320回の事業に4,734人が参加している。

「観る」に対応した公演事業では、「伝説の女優 Legends!」や「子午線の祀り」、「ロミオとジュリエット」などの話題作に加え、ロイヤル・シェークスピア・カンパニーの「オセロー」、子どものためのシェイクスピア「ハムレット」、イッセー尾形の一人芝居、山海塾「ひびき」など、幅広い作品が公演された。公演作品数は23本、公演回数は46回で、入場者数は26,361人である。

その他にも歌舞伎や狂言を含めた提携公演、北九州演劇祭なども実施しており、それらを含めた公演事業全体(創造事業、公演事業、提携事業、演劇祭)の公演本数は35本、公演回数は85回、入場者数は37,095人で、入場率は昨年度と同様、ほぼ90%の水準を達成している(2004年度の詳しい事業の実績は、p.5～6の図表1-3を参照)。

さらに、観客だけではなく、主催事業の出演者や関係者、貸館の利用者などを含めた、北九州芸術劇場の利用者数、利用件数は下表のとおりで、2004年度には約2,500件の利用者数、総利用者数は延べ53万人となっている。

図表1-2 利用者数、利用件数(2003年度、2004年度)

	2003 年度				2004 年度				累計
	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計	
自主事業	23,937	22,890	7,402	54,229	22,445	29,970	16,996	69,411	123,640
	(66)	(143)	(121)	(330)	(87)	(242)	(404)	(733)	(1,063)
貸館	93,100	41,524	10,769	145,393	175,273	71,901	13,626	260,800	406,193
	(205)	(145)	(99)	(449)	(482)	(325)	(176)	(983)	(1,432)
合計	117,037	64,414	18,171	199,622	197,718	101,871	30,622	330,211	529,833
	(271)	(288)	(220)	(779)	(569)	(567)	(580)	(1,716)	(2,495)

* 上段の数字が利用者数、下段()内の数字は利用件数

図表1-3 北九州芸術劇場 自主事業実績一覧(2004年度)

1. 創造事業							
	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	わたしの青い鳥	中劇場	7/11	1	506	489	97%
2	冒険王	小劇場	12/15～19	7	882	796	90%
3	シアターラボ2005	小劇場	2/19～20	3	424	360	85%
4	ルル～破滅の微笑み～	中劇場	3/23～27	4	2,308	1,647	71%
計				15	4,120	3,292	80%
2. 公演事業							
	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	白石加代子「源氏物語」	中劇場	4/22	1	627	616	98%
2	オセロー	中劇場	5/5	1	684	659	96%
3	バナナがすきな人	中劇場	5/25～26	2	1,284	1,111	87%
4	時の物置	中劇場	6/26～27	2	1,252	1,115	89%
5	はりねずみのハンス	中劇場	7/24～25	2	816	702	86%
6	伝説の女優	大ホール	7/29～30	2	2,428	2,412	99%
7	シェイクスピアを盗め	中劇場	7/29～30	2	856	535	63%
8	月猫えほん音楽会	中劇場	8/1	1	552	445	81%
9	ハムレット	中劇場	8/6～7	2	814	699	86%
10	ピーターパン	大ホール	8/14～15	2	1,988	1,817	91%
11	ハローグッバイ	中劇場	9/17～18	2	896	641	72%
12	アンティゴネ	中劇場	10/2～3	2	958	639	67%
13	イッセー尾形一人芝居	中劇場	10/22～24	3	1,893	1,789	95%
14	白夜	中劇場	11/21	1	442	393	89%
15	化粧	中劇場	12/3	1	656	630	96%
16	賢治幻想 電信柱の歌	小劇場	12/24～25	2	224	180	80%
17	山海塾「ひびき」	中劇場	12/25～26	2	766	727	95%
18	大騒動の小さな家	中劇場	1/8～9	3	1,932	1,834	95%
19	ナイロン100℃公演	中劇場	1/14～15	2	1,102	1,100	100%
20	子午線の祀り	大ホール	1/18～19	2	2,396	2,298	96%
21	ロミオとジュリエット	大ホール	2/4～5	4	4,636	4,608	99%
22	ファンタスティックス	中劇場	2/23～24	2	1,188	1,171	99%
23	屋根裏	小劇場	3/5～6	3	300	240	80%
計				46	28,690	26,361	92%
3. 北九州演劇祭							
	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	せかいの終わり	小劇場	9/3～5	5	550	525	95%
2	パントマイムフェスティバル	小劇場	10/9～10	4	716	706	99%
計				9	1,266	1,231	97%
4. 提携事業							
	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場数	入場率
1	劇団MONO公演(提携)	小劇場	12/4～5	3	372	324	87%
2	南河内万歳一座公演(提携)	小劇場	1/29～30	3	348	288	83%
3	酒の神「ディオニュソス」	中劇場	2/12～13	2	1,202	528	44%
4	野村万作・萬斎狂言公演(共催)	中劇場	8/19～20	3	2,046	1,977	97%
5	松竹大歌舞伎(共催)	大ホール	9/5	2	2,448	1,982	81%
6	歌舞伎ゼミナール(共催)	中劇場	10/8	2	1,316	1,112	84%
計				15	7,732	6,211	80%
合計(創造・公演・提携事業・演劇祭)				85	41,808	37,095	89%

5. 学芸事業

	事業名	会場	実施月	回数	対象	参加者数	備考
(ワークショップ参加)							
1	表現教育推進事業(実践)	小学校	6~2月	55	小学生	434	鴨生田小 西小倉小
	〃 鴨生田小5年発表	小学校	11/5・7日	2	一般	1,060	観覧者
	〃 鴨生田小6年発表	小学校	1/28	1	一般	450	観覧者
	〃 西小倉小6年発表	中劇場	2/4	1	一般	400	観覧者
	表現教育推進事業(初級理論)	稽古場	5月	10	一般	45	
	表現教育推進事業(中級理論)	稽古場	1~3月	8	初級合格者	17	
	表現教育推進事業(教職員)	稽古場	8月	5	教職員	25	
2	劇場塾(アーツマネージメント)	稽古場	5~6月	8	一般	21	
	劇場塾(戯曲講座)	稽古場	5~9月	6	一般	11	
	〃 リーディング公演	稽古場	10/23	1	一般	64	観覧者
	劇場塾(俳優基礎講座)	稽古場	6~8月	4	一般	26	
	劇場塾(俳優実践講座)	稽古場	8/7~9	3	一般	22	
	劇場塾(俳優実践講座・南河内)	小劇場	1/25~26	2	一般	22	
	劇場塾(照明・音響・舞台美術)	小劇場・セミナールーム	1~3月	10	一般	22	
3	糸あやつり人形ワークショップ	小劇場	7/22~23	2	一般	70	
	チャレンジ! えんげき	小劇場	7/27~31	5	小学生	30	
	〃 発表	小劇場	7/31	1	一般	106	観覧者
	エンゲキで遊ぼう!	稽古場	8/6	1	小学生	28	
4	ボックスステージツアー「こども裏方隊」	中劇場	7/29~30	2	小・中学生	57	
	劇場見学ツアー「冒険王」	小・中劇場	12/12	3	一般	41	
	ボックスステージツアー「特捜! 劇場刑事」	大ホール	3/11~13	5	一般	98	
5	「月猫えほん音楽会」読み聞かせワークショップ	小学校	7/8	1	一般	35	
6	パントマイム学校アクティビティ	小学校	8~9月	20	小学生	1,137	
7	イッセイ尾形ら演劇ワークショップ	中劇場	10月	6	一般	15	
8	蟬丸ダンスワークショップ	小劇場	11/25~27	3	一般	39	
9	春の子ども演劇体験「探検! 危機一髪」	大手町練習場	3/23	1	一般	40	
10	伊藤千枝ダンスワークショップ	小劇場	3/25~27	3	一般	28	
(創造参加)							
1	わたしの青い鳥	中劇場	5~7月	14	一般	106	
2	北九州ドラマ創作工房	陣山公民館等	7~2月	20	一般	38	
	〃 発表	小劇場	2/13	2	一般	187	観覧者
3	パントマイムフェスティバル	小学校	9~10月	10	一般	27	
4	せかいの終わり	稽古場	8~9月	43	一般	14	
5	冒険王	稽古場	11月~12月	37	一般	12	
6	シアターラボ	稽古場	10~2月	25	一般	7	
計(学芸事業)				320		4,734	
総計				405		41,829	

(3) 施設稼働率

- 北九州芸術劇場の2004年度の稼働率は、大ホールが79%、中劇場が73%、小劇場が72%と、昨年度と比較すると、20～25%減少した(図表1-4)。昨年度は開館初年度であり、主催事業が集中的に開催されたため、100%の稼働率となった月もあったが、今年度は、一ヶ月当たりの主催事業の公演本数が減少したことが、稼働率減少の主因と考えられる。
- なお、稼働率算出の基準が若干異なるが、(社)公立文化施設協会加盟館の全国平均の稼働率57.6%(2002年度)と比較すると、依然高い水準にある。

図表1-4 北九州芸術劇場の稼働率(2003年度、2004年度)

	2003年度			2004年度		
	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場
公演日数	99	100	83	219	207	220
利用対象日数	103	107	86	277	283	304
稼働率	96.1%	93.5%	96.5%	79.1%	73.1%	72.4%

注) 稼働率は「稼働日数/利用対象日数」
利用対象日数は、保守点検日・調整日を除いたもの

2. 事業費の内訳と収支

次に、北九州芸術劇場の事業費の財源内訳と収支について、昨年度と同様の分析を行った。

(1) 事業費の財源と事業支出の内訳

- 北九州芸術劇場の2004年度の事業費は約3億4,000万円で、その財源の内訳は図表1-5のとおりである。内訳は、チケット収入が43.2%、市の補助金が36.9%、文化庁と(財)地域創造の外部資金が19.9%となっている。
- 昨年度に比べて、チケット収入の割合が減り、市補助金の割合が増えているが、2割を外部資金で賄っており、劇場のファンドレイズの努力が伺える。
- 財団運営の公立ホールの平均的な事業費の財源((財)地域創造調査、2002年12月)をみると、チケット収入の割合は、都道府県が41.0%、政令市・特別区が45.7%、補助金の割合が同じく54.0%、50.9%、外部資金の割合が同じく4.9%、3.4%となっている。
- このデータとの比較では、北九州芸術劇場の2003年度のチケット収入の割合は全国並みだが、外部資金の獲得で大きな成果をあげることで、市の補助金の割合は全国平均よりかなり下回っていることがわかる。

図表1-5 事業費の財源内訳

(千円)

	2003年度		2004年度		備考
	金額	内訳	金額	内訳	
チケット収入	215,389	54.1%	145,429	43.2%	
市補助金	112,225	28.2%	124,198	36.9%	
外部資金	70,700	17.7%	67,000	19.9%	
文化庁	(49,000)	(12.3%)	(49,000)	(14.6%)	外部資金の内数
地域創造	(10,000)	(2.5%)	(18,000)	(5.3%)	
日本財団	(11,700)	(2.9%)	—	—	
計	398,314	100.0%	336,627	100.0%	

(2) 事業収支

- また、北九州芸術劇場の2004年度の文化振興特別会計の収入の部の決算報告を見ると、事業収入はほぼ予算どおり、市補助金、助成金は、当初予算額より、それぞれ約1,100万円、700万円少なくなっている。
- 昨年度と比較すると、市の補助金が当初予算より下回った割合は縮小しているが、事業収入の決算額がほぼ予算どおりだった点を含め、予算額と決算額の差異が縮まっており、その点は、2年目を向かえて、事業収支の面で経営の健全化が図られたひとつの成果と判断できる。

図表1-6 事業収入、補助金等収入の予算額・決算額(2003年度、2004年度)

	2003年度			2004年度		
	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異
事業収入	194,300	215,389	△ 21,089	146,346	145,429	917
補助金等収入	205,700	182,925	22,775	209,300	191,198	18,102
市補助金	135,000	112,225	22,775	135,000	124,198	10,802
助成金	70,700	70,700	0	74,300	67,000	7,300

第2章 観客の特性と観客からみた評価

本章では、2003年度に引き続き実施している観客調査(アンケート調査)の結果から、2004年度の公演に来場した観客の特性、観客からみた北九州芸術劇場の評価を整理・分析した。

*本章における「観客」とは、公演に来場した観客のうち、アンケート調査への回答者のことであり、観客の特性、観客からみた劇場の評価は、回答を統計的に分析した観客の傾向であることに留意されたい。

1. 観客調査の実施要領

- 調査対象:2004年度に実施した自主・共催事業公演 35公演
- 配布・回収方法:公演開演時に配布、終演時に回収(後日ファックス、郵送にて回収も受付)
- 配布数:定員×配布公演数=34,236件、有効回答数:4,708件、回収率:13.8%
- 調査対象の公演名、公演ごとの配布数・回収数の詳細は、p.資-5～資-7を参照されたい。

*調査対象、配布・回収方法、配布数の設定方法は2003年度と同じ要領で実施しているが、調査票はA4・2ページ(裏表印刷で1枚)に収まるものとし、若干質問項目を整理した。

2. 観客調査の結果概要

(1) 観客調査の回答者の属性

- 性別は、「女性」が74.2%、「男性」が12.7%と、「女性」が高い割合を占める。
- 平均年齢は、42.3歳。最も割合が高いのは「30歳代」(19.2%)、次いで「40歳代」(16.7%)。2003年度調査と比較すると、平均年齢でも、若い年齢層が増加している(2003年度調査の平均年齢:45.5歳、最も割合が高い年齢層:「60歳以上」(20.4%))。
- 性別に公演ジャンルの傾向をみると、男性の鑑賞者が多いのは「小劇場・現代演劇」、「ダンス・舞踏」。女性の鑑賞者が多いのは「ミュージカル・商業演劇」、「古典芸能」。
- 年齢別に公演ジャンルの傾向をみると、年齢層が高いのは「古典芸能」で、「60歳以上」が31.1%を占める。一方、「その他のジャンル」では「18歳未満」の来場者が多いが(20.0%)、これは、「わたしの青い鳥」、「はりねずみのハンス」、「月猫えほん音楽会」など、子どもの来場者が多い作品が分類されているためと考えられる。
- 居住地域は、「北九州市内」の割合が63.3%と最も高く、周辺地域も含めると約7割が北九州市域からの来場者である。
*なお、2003年度調査では、遠賀郡等の近隣郡部の居住者や、九州内の他県の居住者が「その他」に回答していた為、「その他」地域の割合が高かった。2004年度はその調査を受け、2003年度調査の結果から、居住エリアの設定の見直しを行った。
- チケットクラブ入会の有無は、非会員が73.4%を占めている。非会員のうち、約3割に入会意向があり、約3割は「無回答」である。

(2) 鑑賞した公演や劇場に関する意見

① 来場公演のジャンル

- 来場公演のジャンルは、「小劇場・現代演劇」:45.1%、「ミュージカル・商業演劇」:24.1%、「古典芸能」:22.0%、「その他のジャンル」:5.7%、「ダンス・舞踏」:3.0%である。これは、自主・共催事業公演35公演のうち20公演が「小劇場・現代演劇」ジャンルというラインナップを反映している(2003年度は、開場記念事業として幅広いジャンルの公演を実施しており、観客調査への回答者割合は「ミュージカル・商業演劇」:34.7%、「古典芸能」:23.5%、「小劇場・現代演劇」:21.2%となっている)。

*なお、2003年度調査では「音楽劇」、「クラシック音楽」の分類を設けていたが、2004年度調査では一部分類を変更し、2003年度調査の「音楽劇」にあたる公演は、「小劇場・現代演劇」または「その他のジャンル」に分類している。また、2004年度は「クラシック音楽」公演は実施していない。

②公演情報の入手経路

- 公演情報の入手経路は、「友人・知人から聞いた」(23.1%)の割合が最も高く、次いで「ダイレクトメール」(19.5%)、「新聞」(15.6%)となっており、2003年度調査では、情報源として割合が高かった「北九州市政だより」やマスメディア系の情報入手経路の割合は低くなっている。
- 「ダイレクトメール」は、2003年度調査と比べ、全体で+4.5%、チケットクラブ会員では+23.5%(2003年度調査:35.4%→2004年度調査:58.9%)と大きく増加している。
- 年齢別にみると、50歳代、60歳代では「新聞」と「北九州市政だより」、30歳未満では「街中のチラポスター」と「友人・知人から聞いた」の割合が高い。ジャンル別にみると、「その他のジャンル」で「その他」回答が多いが、これは学校からの便りや案内で来場している人が多いためと考えられる。また、他のジャンルに比べて「出演者から聞いた」の割合も高い。

③公演に来た理由

- 公演に来た理由は、「出演者等が好きだから」、「公演内容が面白そうだったから」がそれぞれ約5割を占める。なお、開館年度の2003年年度調査では「劇場に来てみたかったから」が約3割を占めていたが、開場2年目の2004年度は7.9%に留まっている。

④公演前後の飲食・ショッピング

- 公演鑑賞者の63.3%が公演前後に飲食・ショッピングをしており、している場合の平均金額は約4,000円である。

(3) 公演や劇場に対する満足度

- 2003年度調査と比べて、ほとんどの項目で満足層の割合が高くなっているとともに、「たいへん満足」の積極的な評価の割合も高くなっている。
- 満足層の割合(「たいへん満足」+「まあ満足」、無回答を除く)はいずれの項目も7割以上と高い。特に、「本日の公演内容」、「劇場係員の対応」、「劇場の立地」は満足層の割合が9割以上となっているほか、「たいへん満足」の割合も4割以上となっており、特に観客の評価が高い。
- 2003年度は満足層の割合が7割未満だった「公演情報の入手のしやすさ」は+8.4%で73.3%に、「チケットの予約・購入のしやすさ」は+19.8%で72.9%になっている。
- 満足度については、いずれの項目も年齢層が高くなるほど満足度は低くなる傾向がある。また、ほとんどの項目で女性の方が満足度は低い傾向がある。
- なお、2004年度調査の回答者は2003年度調査に比べて年齢層が若く、若い年齢層ほど満足度が高いのは2003年度調査でも顕著に現れた傾向である。したがって、本年度の満足度の高さには、年齢層が低くなった影響もあると考えられる。
- しかし、それを踏まえたとしても、公演内容や劇場係員の対応・サービスの満足度の高さ、2003年満足度が低かった情報やチケット関連項目に関する満足度の大幅な向上は、北九州芸術劇場の運営や事業に関する1年間の努力として評価すべきであろう。
- 北九州芸術劇場への総合的な満足度をみると、満足層の割合は92.1%、2003年度とほぼ同じ割合(91.6%)である。

(4) 劇場の運営方針について

- 北九州芸術劇場の基本方針の「観る」、「創る」、「育つ」、いずれも賛同する人の割合は9割以上である。
- 「創る」、「育つ」は、2003年度調査では「無回答」の割合が若干高かったが、2004年度調査では「無回答」が下がり、「ぜひやってほしい」の割合も3~5ポイント増えている。特に、「育つ」については、「18歳未満」の年齢層では7割が「ぜひやってほしい」と回答している。

(5) 日頃の鑑賞活動

- 公演に出かける頻度は、「年に3~4回」(24.7%)、「年に1~2回」(20.6%)、「年に5~9回」(19.4%)となっており、来場者の鑑賞頻度は偏りが無い。
- 性別では、「女性」の方が相対的に鑑賞頻度は高いが、「月に3回以上」と鑑賞頻度の高い層では「男性」の割合が高い。年齢別では、「18歳未満」の鑑賞頻度が相対的に低く、「30歳代」が相対的に高い。ジャンル別では、「ダンス・舞踏」の鑑賞者で鑑賞頻度が高い。
- 北九芸術劇場での鑑賞経験は、「今日が初めて」が33.1%と最も割合が高く、次いで「3~5回」(25.2%)、「1~2回」(20.9%)となっており、初めてからリピーターまで来場者の北九州芸術劇場での鑑賞経験は多様である。なお、チケットクラブの会員は、すでに6回以上来場している人が4割以上を占めている。
- 日頃興味あるジャンルは、「ミュージカル・宝塚歌劇」(56.3%)、「有名俳優の演劇」(55.0%)の割合が高い。一方、2003年度調査に比べると、「映画」(51.5%)、「小劇場・現代演劇」(43.8%)が高くなっており、興味のあるジャンルは多様になっている。

第3章 学芸事業の参加者からみた評価

北九州芸術劇場では、劇場の組織の中に「学芸係」を設置し、ワークショップや講座、学校との連携、創造参加など、積極的に学芸事業を展開している。2004年度調査では、2003年度、2004年度の学芸事業のうち、一般を対象とした講座・ワークショップ型事業と創造事業への参加者を対象に参加者調査とグループインタビューを実施し、学芸事業参加者の特性、参加者からみた学芸事業の評価を整理・分析した。

アンケート調査の実施要領はp.資-61、グループインタビューの実施要領はp.資-91～92を参照されたい。

1.参加者調査の結果概要

*学芸アンケートは、配布数が少ないため、回収数も123件となっており、統計的な分析がむずかしい。そのため、分析にあたっては、割合(%)とともに件数を併記している。

*本章における「参加者」とは、学芸事業参加者のうち、アンケート調査への回答者のことであり、観客の特性、観客からみた劇場の評価は、回答内容を分析した観客の傾向であることに留意されたい。

(1) 参加者の属性

- 性別は、「女性」が74.8%(92名)、「男性」が21.1%(26名)で、「女性」が高い割合を占める。
- 平均年齢は、29.8歳。「18歳未満」と「18～29歳」がともに22.8%(28件)と最も高い割合を占めている(観客調査では、「18歳未満」は全体の4.1%)。次いで、「30歳代」(16.3%(20件))、「40歳代」(14.6%(18件))、50歳以上は9%(11名)である。なお、「18歳未満」のうち約8割(23件)が12歳以下の子どもたちからの回答である。
- 職業をみると、「小中学生・高校生」が26.%(32件)の参加者が多いが、会社員や公務員(会社・団体役員を含む)、自営業など、職業に就いている人の割合も約36%(44件)となっており、時間的な制約のある中で参加している人も多い。
- 居住エリアは「北九州市」が66.7%(82名)、「北九州市周辺」が4.1%(5件)と、北九州市とその周辺で約7割となっている(観客調査でも約7割)。また、福岡市およびその周辺からの参加者も16.3%(20件)と、鑑賞事業(9.2%)に比べて高い割合となっている。

(2) 参加した講座やワークショップについて

①情報の入手経路

- 情報の入手経路は、「友人・知人から聞いた」(35.0%、43件)、「公演会場で配布されたチラシ」(31.7%、39件)の割合が高い。

②参加理由

- 参加した理由は、「表現力・創作力のスキルアップのため」(58.5%、72件)、「演劇やダンスに興味があるから」(48.8%、60件)といった舞台芸術への興味や表現活動・創作活動興味からの理由が高い。一方、「新しいことを始めたかったから」(23.6%、29件)、「コミュニケーション能力を身につけたいから」(18.7%、23件)など、日常生活への波及効果を目的に参加する人もおり、参加理由は多様である。

③参加した講座やワークショップの満足度や今後の参加意向など

- 参加した講座やワークショップに対する満足度は非常に高く、「内容」、「講師」、「日にち、時間」、「期間」、「劇場係員の対応」、「料金」の6項目いずれについても満足層の割合(「たいへん満足」+「まあ満足」、無回答を除く)は8割以上となっている。

- 特に、「内容」、「講師」、「劇場係員の対応」の3項目については、ほぼ全員が満足していると回答している（「内容」：97.5%（117件）、「講師」：96.6%（115件）、「劇場係員の対応」：99.2%（118件））。
- また、この3項目は、「たいへん満足」の割合も6割以上と高く、特に「講師」については72.4%（89件）を占める。なお、講師や劇場側の対応については、自由回答やグループインタビューでも大変評価が高い。

④北九州芸術劇場以外での講座やワークショップへの参加経験や今後の意向

- 北九州芸術劇場以外での講座やワークショップへの参加経験は、「ある」が43.1%（53件）、「ない」が54.5%（67件）である。
- 今後の講座やワークショップへの参加の意向については、ほとんど全員（98.2%、121件）が参加を希望しており、「ぜひ参加したい」も56.1%（69件）を占める。

⑤講座やワークショップの効果や影響

- 講座やワークショップに参加した効果や影響について、最も回答が多いのが「人間関係に広がり生まれた」（66.7%、82件）、次いで「演劇やダンスに新たな興味がわいた」（65.0%、80件）、「劇場が身近になり、足を運ぶ回数が増えた」（56.9%、70件）、「より多くの公演を鑑賞したいと思った」（50.4%、62件）、「仕事や活動の幅、可能性が広がった」（43.1%）と続く。
- 回答者一人が平均5.9の項目に回答しており、講座やワークショップに参加することは、舞台芸術や劇場への意識や、鑑賞活動への効果や影響だけではなく、日常生活や価値観に影響を与えていることがわかる。

(3) 日頃の鑑賞活動、学芸事業の方針や劇場の運営方針など

①北九州芸術劇場での鑑賞頻度

- 北九州芸術劇場での鑑賞回数は、「3～5回」の割合が30.9%（38件）と最も高く、次いで「1～2回」（27.6%、34件）、「6～9回」（18.7%、23件）、「10回以上」（15.4%、19件）となっており、講座やワークショップへの参加は、鑑賞経験の多少に関係ないものの、実際に数多くの公演を鑑賞している人も多いといえよう。

②学芸事業の方針について

- 北九州芸術劇場が学芸事業として柱としている、
 - 1)人材育成事業（舞台芸術の専門家の育成）
 - 2)舞台芸術普及事業（演劇を中心とした舞台芸術の観客の掘り起こし）
 - 3)社会貢献事業（教育、福祉、医療、地域コミュニティへの貢献事業）
 - 4)舞台芸術研究（舞台芸術や劇場文化の研究、劇場事業の記録収集、作成など）
 の4つの事業に関する意見に賛同する人の割合（「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」、無回答を除く）は、いずれの事業についても9割以上となっている。4つの事業のうち、「人材育成事業」、「舞台芸術普及事業」、「社会貢献事業」についてはほとんど全員が賛同しており、「ぜひやってほしい」という積極的な賛同者も約7割を占める。

③劇場の運営方針について

- 北九州芸術劇場の「観る」、「創る」、「育つ」の3つの運営方針については、いずれについてもほとんど全員が賛同している。また、「ぜひやってほしい」という積極的な賛同の割合も高く、「創る」（69.1%、85件）、「育つ」（75.6%、93件）については、観客調査と比べ（「創る」：48.3%、「育つ」：50.3%）と比べ、「創る」では+20.8%、「育つ」では+25.3%となっている。

2. グループインタビューの結果概要

グループインタビューは、アンケート調査では把握しきれない学芸事業への参加の動機、参加の影響や効果、今後の学芸事業への要望等を詳しく把握することを目的に、アンケート調査の回答者で、グループインタビューへの協力に同意した学芸事業の参加者を対象として実施した。

グループインタビューの実施にあたっては、参加した事業の内容、参加者の属性(年齢、地域など)に配慮し、

グループ1:ダンスワークショップ、演劇ワークショップ参加者(6名)

グループ2:劇場塾(戯曲、アートマネジメント、舞台技術、照明、音響)、シアターラボ参加者(5名)、

グループ3:表現教育講座参加者(3名)

の3つのグループを設定した。

グループインタビューから得られた学芸事業に関する意見の概要は、以下のとおりである。

(1) 参加の動機や目的

- 参加の動機や目的は、講座の目的や内容の違いを反映し、グループごとに異なっている。
- グループ1では、ダンスや演劇、または講師(舞踊家、俳優など)が好きだから、あるいは、ワークショップ自体に興味を持って参加した人が多い。
- グループ2では、ダンスに興味があってという意見とともに、劇団に所属したり、俳優を目指していることから、より実践的に舞台芸術に関わりたいという動機で参加した人もいる。
- グループ3では、演劇という手法を用いてコミュニケーション能力を養うこと、現在の仕事に幅を広げることを目的としている人が中心である。

(2) 事業の内容、進め方について

- いずれのグループにも共通しているのが、事業の内容、講師、さらに劇場側の対応への高い評価である。
- 特に講師に対しては、技術的な指導はもちろん、参加者への配慮や人に教えるという姿勢に対して、共感を持っている人が多い。
- グループ別にみると、グループ1では、普段身近に接する機会のないアーティストに指導を受けられること、グループ2では、安全面に配慮した指導、技術や人に教えるということに対する姿勢、グループ3では、講師が持つ演劇とコミュニケーションを結びつける理論や手法を評価する声が高い。
- グループ2の技術系講座では、いずれの講座についても、シアターラボの仕込みという実践があったことに対して、「充実していた」、「よかった」という意見が多い。また、「劇場のスタッフは、劇場は閉ざされたものではなく、いつでも相談に乗るという姿勢を持っていることを強く感じる」、「ワークショップに財団のスタッフがいつも沢山いるのは、財団がワークショップでどんなことをやっているのか興味を持っているからだと思う」といった、講座やワークショップに対する劇場側の姿勢を評価する声も高い。

(3) 参加して得られたこと、今後やりたいこと

- 学芸事業のアンケートでは、「人間関係に広がり生まれた」(66.7%)、「演劇やダンスに新たな興味がわいた」(65.0%)、「劇場が身近になり、足を運ぶ回数が増えた」(56.9%)、「より

多くの公演を鑑賞したいと思った」(50.4%)など、さまざまな効果が実感されているが、グループインタビューでは、それら効果について、より具体的な意見を聞くことができた。

- グループ1では、「演劇やダンスの見方が変わった」、「身体を通じて表現するということに対する見方が変わった」、「劇場に足を運ぶ機会が増えた」といった、鑑賞活動への影響に関する意見が多い。
- グループ2では、「技術的な面からも舞台が楽しめるようになった」、「裏で働く人の顔が見えるのが新鮮」、「ただ鑑賞にくるだけではなく、自分も劇場に関わっている人なんだと感じる」といった、舞台芸術や劇場への意識への影響を受けたという意見が多く、さらに次のステップに進むための講座を希望する意見が出ている。
- グループ3では、表現教育講座、およびシアターラボで「表現する」ということを学んだことで、「母親だからと自分を作っていたことに気づいた」、「ドラマ創作工房で、自分自身が体験して以来、子どもが芝居を最後までみるようになった」といった、日常生活や価値観への効果や影響をあげる人が多い。また、「劇場に対する偏見が取れたし、劇場に足を運ぶ機会が増えた」など、劇場に対する意識の変化をあげる人もいる。
- また、グループ3に参加した小学校教員からは、表現教育を学んだことで、「一般的な先生像に近づこうとしていたが、ありのままでもいいという姿勢でいけるようになった」という教師である自分に対する効果、「中劇場の舞台で発表をした小学校6年生、それを観た他の学年の子どもたち、いずれにも何かしらの影響を与えている」という子どもたちへの効果、双方の効果を感じていることが語られた。

(4) 学芸事業に対する要望

- グループインタビューの参加者のほとんどが、今後さらに講座やワークショップに参加をしたいという希望を持っており、講座やワークショップへの要望、参加したい講座やワークショップの具体的なアイデアが数多くあがっている。実際、参加者17名中13名がすでに複数の講座やワークショップの受講経験を持つ。
- グループ1では、参加して興味を持ったダンス、パントマイム、演劇などを今後も続けられるしくみを望む声が高い。また、「お年寄りのための創造活動があってもいいのでは」、「初心者向きのものであれば」、「講座の見学が自由にできれば、もっと参加したいと思う人も増えるのでは」といった意見が出ている。
- グループ2では、技術型のワークショップであることから、学んだ技術をさらに発展させるための講座を望む声が大変高い。また、「一つの作品を作り上げるまでの長期スパンで取り組む講座があれば」、「演劇経験のない人のために1日の体験講座があってもいいのでは」、「演劇とは何かを学べる講座があるとよい」、「小道具を中心とした舞台講座であれば子どもでも実践的では」、「戯曲講座の作品が、シアターラボでの公演やリーディングでの上演以外にも陽の目を見る機会があれば」といった具体的な意見も出ている。
- グループ3では、「探検ツアーに参加すると、子どもたちはまた劇場に行きたいと言うし、親も興味を持つようになる。そういう機会をたくさん作ってほしい」、「せっかくできた人と人とのつながりが切れてしまわないように、講座参加者でこうして集まる機会があれば」という意見が出ている。
- また、グループ2、3に共通して、「講座情報が入りにくい」、「地域で活動している劇団などにも情報を流してほしい」といった、劇場からの情報発信について、要望がある。

(5) 北九州芸術劇場全般などについて

- 今後、北九州芸術劇場がより身近な存在になるよう、劇場情報を流してほしいと望む意見、地域の小劇団などとの関わりについて劇場側からの積極的な姿勢を求める意見が出ている。これは、劇場の学芸事業、公演事業への評価から、それらをより多くの人に広報・宣伝してほしいという趣旨からの発言である。
- また、「北九州演劇祭のときに、街全体で盛り上がっていきこうという雰囲気を感じられてよかった。劇場は街を元気にすると実感」といった劇場が街に及ぼす効果や、「北九州に元気な高齢者が増えるのはいいこと。学芸事業はそのきっかけになるはず」、「子どもの学習能力を伸ばすためには、創造力が必要であり、それを耕すのが表現教育」といった高齢者や子どもに対して、学芸事業がもたらす効果に期待する声も高い。

第4章 経済波及効果とパブリシティ効果

劇場の運営は、様々な経済効果を生み出し、地域活性化を促すと言われている。ここでは、2003年度調査で十分な検討を行わなかった経済波及効果について、産業連関表を用いた分析を行うとともに、2003年度調査に引き続き、パブリシティ効果について、その概要と金額換算による規模の把握を行った。

1. 経済波及効果

劇場の運営にともなう経済波及効果には、劇場および観客の支出からなる最終需要(直接的経済効果)、それに伴う生産増、そしてそれらからもたらされる所得増、雇用増、税収増などが考えられる。

経済波及効果としてどこまでを含めるかについては、ケースバイケースであるが、今回の調査では、基礎的な経済波及効果として、産業連関表に基づいて、生産増までを試算することとした。

(1) 北九州芸術劇場の経済波及効果の基本構造と分析方法

- 経済波及効果をもたらす支出(最終需要)は、
 - ①劇場の運営管理に関する支出
 - ②劇場の主催事業に関する支出
 - ③劇場の主催事業の観客の消費支出
 - ④貸館の事業主催者の事業支出
 - ⑤貸館事業の観客の消費支出の5つに分類することができる(図表4-1参照)。
- 今回の調査では、①、②については、劇場の運営データに基づいて、③については観客アンケートの調査結果に基づいて、把握・推計を行った。
- ④については貸館事業者からのデータ提供が必要であるが、今回は調査対象となっていないため、貸館事業の1公演あたりの支出を、主催事業1公演あたりの支出の20%もしくは30%と想定して、この二つのケースについて、支出額を試算した。
- また、主催事業の観客アンケート調査の結果をみると、北九州市内だけではなく、九州全域や他の地域からも幅広く観客を集めているのに対し、貸館の事業内容をみると、同じように幅広いエリアから集客したり、同じような消費活動を行ったりしているとは考えにくいため、⑤については、③のデータを援用して試算した。
- したがって、④、⑤の計算結果については、あくまでも参考値である。

(2) 分野別の最終需要と経済波及効果

- 上記①から⑤の分野別に見た最終需要と、産業連関表を使った経済波及効果の計算結果は、図表4-1に示したとおりである。
- ①劇場の運営管理、②劇場の主催事業、③主催事業の観客の消費支出にともなう最終需要の金額は、それぞれ7億400万円、5億3,400万円、1億9,500万円であり、合計で14億3,300万円となっている。そのうち、73.4%にあたる10億5,100万円が、北九州市内での最終需要とである。
- これらの最終需要にともなう経済波及効果は、①劇場の運営管理、②劇場の主催事業、③主催事業の観客の消費支出の順に、9億6,400万円、8億800万円、2億8,600万円となってお

り、合計で20億5,800万円である。そのうち、68.2%にあたる14億300万円が北九州市内での経済波及効果である。

- 生産誘発係数は、全体で1.44、北九州市内で1.33である。
- また、参考値ではあるが、貸館の事業主催者の支出および貸館の観客の消費支出による経済波及効果（北九州市内のみと想定）は、11億7,200万円から14億5,500万円で、生産誘発係数は1.33である。
- それらをあわせた経済波及効果の総合計は、32.3～35.1億円で、北九州市内に限ってみると、25.8～28.6億円となっている。

図表4-1 北九州芸術劇場の経済波及効果

		最終需要	経済波及効果	誘発係数
運営管理・主催事業	①運営管理 事務局経費、委託費、光熱水費、その他	7億 400万円 (6億4,700万円)	9億6,400万円 (8億6,800万円)	1.37 (1.34)
	②主催事業 出演料、創作スタッフ費、音楽費、製作費(交通費、宿泊費、食費、制作雑費)、宣伝費、記録費、予備費	5億3,400万円 (2億6,500万円)	8億 800万円 (3億5,200万円)	1.51 (1.32)
	③主催事業観客消費支出 飲食・買物費、交通費、宿泊費	1億9,500万円 (1億3,800万円)	2億8,600万円 (1億8,300万円)	1.47 (1.33)
	小計	14億3,300万円 (10億5,100万円)	20億5,800万円 (14億300万円)	1.44 (1.33)
貸館(参考値)	④貸館事業(貸館主催者の支出) 出演料、製作費、その他	4億2,800万円 ～6億4,200万円	5億6,500万円 ～8億4,700万円	1.32
	⑤貸館事業観客消費支出 飲食・買物費、交通費、宿泊費	4億5,100万円	6億800万円	1.35
	小計(参考値)	8億8,000万円 ～10億9,400万円	11億7,200万円 ～14億5,500万円	1.33
	合計(参考値)	23億1,300万円 ～25億2,700万円 (19億3,100万円～ 21億4,500万円)	32億3,100万円 ～35億1,300万円 (25億7,500万円～ 28億5,800万円)	1.39 ～1.40 (1.33)

注) 下段の括弧内の数字は、北九州市内の最終需要、経済波及効果。貸館については、最終需要、経済波及効果とも北九州市内のみと想定した試算結果である。

2. パブリシティ効果

文化的な催しや劇場運営においては、新聞や雑誌への記事掲載やテレビ報道などによって、地域の認知度向上やイメージアップが図られるケースが多く、それらは「パブリシティ効果」と呼ばれている。そして、その効果は、記事の大きさなどを基準にした広告宣伝費を目安にして、しばしば金額換算される。

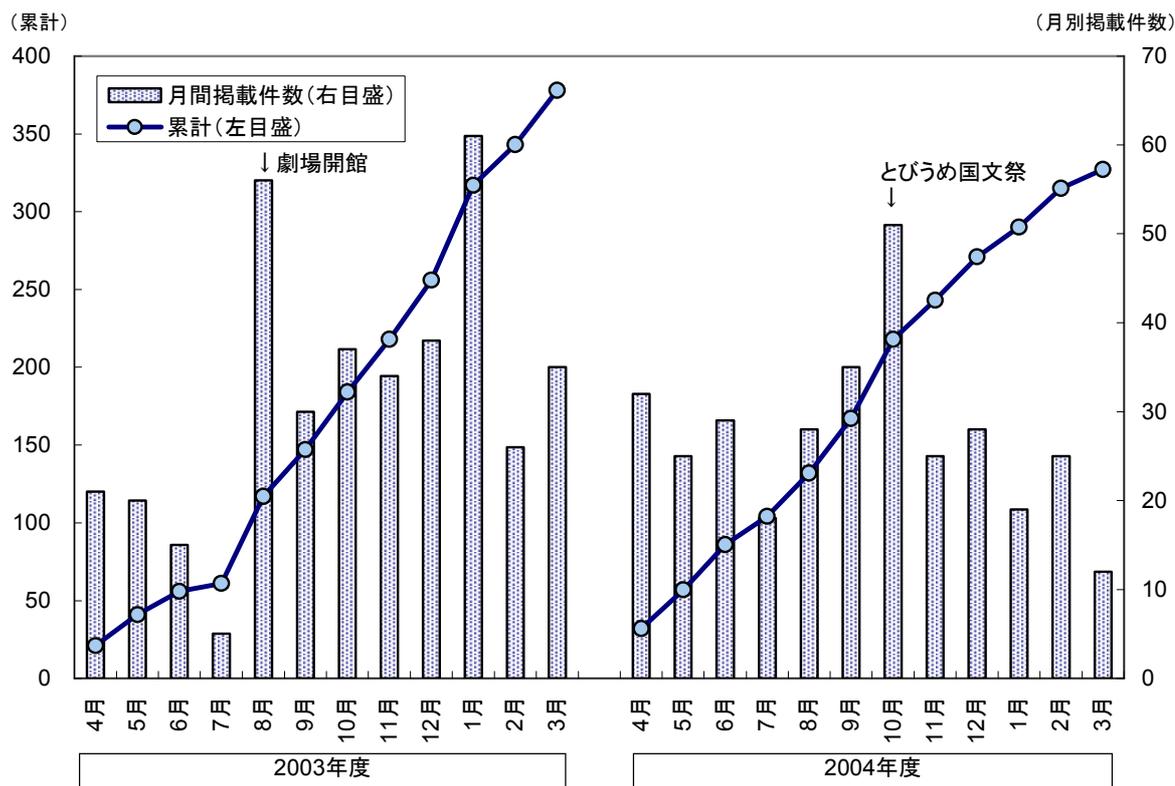
2003年度の事業評価調査では、新聞記事に焦点を当ててパブリシティ効果を算出した。開館年の2003年度は、劇場の開館や開場記念事業、新年のイベント情報や劇場への取材記事が数多く掲載され、パブリシティ効果として換算した金額は、約2億1,000万円であった。

2003年度に引き続き、2004年度も新聞の掲載記事から、北九州芸術劇場のパブリシティ効果を分析した。

(1) 2003年度の掲載記事の件数と内容

- 2004年度(2004年4月～2005年3月)についてみると、「北九州芸術劇場」をキーワードに検索された新聞記事の件数は327件であった(図表4-2)。
- 2003年度の掲載件数(378件)には及ばないものの、10月には「とびうめ国文祭」に関連した記事が数多く掲載され、月間掲載件数は50件を超えた。

図表4-2 新聞記事掲載件数の推移(2003年度、2004年度)



資料) 「日経テレコン」記事検索の結果より作成

- 新聞別に見ると、最も多いのは西日本新聞(147件)、次いで、読売新聞(61件)、朝日新聞(52件)、日経新聞(32件)、毎日新聞(31件)となっている。朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日経新聞は西部地域版が大多数を占める(図表4-3)。

図表4-3 2004年度新聞別件数一覧

掲載紙	掲載件数	
	2003年度	2004年度
西日本新聞	151	147
読売新聞	40	61
朝日新聞	78	52
日本経済新聞	34	32
毎日新聞	58	31
産経新聞	2	1
東京新聞	3	1
中日新聞	1	1
その他	11	—
計	378	327

資料) 「日経テレコン」記事検索の結果に基づく

注) 2004年度の掲載件数の多い順に記載

- これらの記事は、概ね次の5種類に分類できる。
 - ① 北九州芸術劇場の公演紹介・取材記事、劇評など
 - ② 北九州芸術劇場のPRキャンペーン、劇場主催イベントの紹介記事
 - ③ 情報コーナーなどでの公演情報の提供等
 - ④ 芸術文化以外のイベント、講演の紹介記事(会場名が「北九州芸術劇場」)
 - ⑤ 情報コーナーなどでの芸術文化以外のイベントの情報提供(会場名が「北九州芸術劇場」)
- これらのうち、記事性の高い①と②を抽出すると163件(2003年度は180件)であり、その内容を、「自主事業／共催事業」、「学芸事業」、「貸館事業」、「その他(劇場全般、劇場職員への取材記事等)」に分類すると、それぞれ、54件、5件、43件、61件であった(図表4.4)。
- 「自主事業／共催事業」のうち、「白夜」(現代舞踊プログラム)、「アンティゴネ」、「子午線の祀り」、「ルル」など北九州芸術劇場以外でも上演されるプログラムは、全国紙や全国紙の地方版でもとりあげられている。特に「ルル」は「北九州芸術劇場プロデュース」ということが前面に出る形で紹介されている。
- 「その他」が61件と最も掲載件数が多くなっているが、これは、「とびうめ国文祭」、「北九州演劇祭」関連記事が多いためである。
- これら、163件の掲載記事について広告掲載料をベースに金額換算すると、約1億7,700万円という結果となった(図表4.4)。2003年度の2億1,000万円と比べて減少はしているが、2004年度も北九州芸術劇場の事業や劇場関連イベントに関する記事は多数掲載されており、開館で話題性の高かった2003年度から掲載件数、換算金額ともに大きく減少していないことは、劇場の事業に対する社会的な認知度が高く、また、積極的な広報活動の成果として評価すべきであろう。

図表4-4 新聞掲載記事の内容と金額換算

	2003年度		2004年度	
	掲載件数	金額換算(千円)	掲載件数	金額換算(千円)
自主事業／共催事業	70	62,140	54	46,211
学芸事業	8	5,331	5	2,141
貸館事業	46	27,072	43	27,235
その他事業	56	114,683	61	101,577
計	180	209,226	163	177,164

注) 金額換算は、写真を含めた記事面積と各新聞社の広告掲載料に基づいて、計算・集計した。

第5章 事業評価の基本フレームに基づいた評価結果

最後に、昨年度の調査研究で設定した事業評価の基本フレームに基づいて、2004年度の北九州芸術劇場の事業評価の結果を整理した。

1. 事業評価の基本フレーム

昨年度の調査で設定した評価の基本フレームは、次の4つである。評価の継続性を維持するため、今年度も、この基本フレームを採用することが妥当だと判断した。

- 劇場の計画目標に関する評価：北九州芸術劇場の事業の基本方針である「創る」「育つ」「観る」に基づき、これらの計画目標がどの程度達成されているか
- 劇場の運営状況に関する評価：観客や劇場利用者への各種サービス、安全管理や清掃・警備など、劇場の運営が適切に行われているかどうか
- 劇場の経営状況に関する評価：事業収支の面で十分な経営努力が行われているか、円滑な組織運営が行われているかどうか
- 劇場運営に伴う派生的効果に関する評価：経済的効果、パブリシティ効果など、劇場の運営に伴ってどのような効果がどの程度発生しているか

2. 評価結果の概要

基本フレームの評価項目ごとの評価結果は、図表5-1に整理したとおりであるが、そのポイントを以下に記述した。

(1) 劇場の計画目標に関する評価

- 2004年度も、「創る」「育つ」「観る」という基本方針に沿って、多様な事業が展開されており、計画目標の達成に向けて、確実な取り組みが行われていると判断できる。
- 今年度は、「育つ」という基本方針に対応する学芸事業について、アンケート調査、グループインタビューを実施したが、学芸事業に対する参加者の満足度は高い。
- また、「人間関係に広がり生まれた」、「演劇やダンスに新たな興味がわいた」、「劇場が身近になり、足を運ぶ回数が増えた」、「より多くの公演を鑑賞したいと思った」、「仕事や活動の幅、可能性が広がった」など、学芸事業への参加の成果について、幅広い積極的な回答が寄せられ、グループインタビューでも鑑賞事業だけでは得られないような深い効果を指摘する声が多かった。
- これらは、表面には現れにくい、劇場運営にともなうアウトカムとして評価できよう。
- また、昨年度と同様、「創る」「育つ」「観る」とも、劇場の運営方針として支持する観客の割合は、いずれも90%を超えていることから、当面は、この運営方針の堅持が望まれる。

(2) 劇場の運営状況に関する評価

- まず、観客サービスについて、昨年度の要改善項目であった、「広報・告知の方法と内容」、「チケット販売のしくみ」は、観客満足度はかなり改善された。この点は、観客の慣れによる要因も大きいと考えられる。
- 昨年度、改善の望まれる項目であった「劇場ロビーにおける飲食・物販サービス」、「劇場スタッフの対応（電話、窓口）」のうち、後者は満足層が9割を超えるまで改善されたが、前者は改善傾向が見られるもののさらなる改善が望まれる。

- 昨年度から満足度の高かった「劇場係員の対応」は、さらに満足度が高くなり、ほぼ100%近い観客が満足している。
- また、2004年度は、施設利用に関するアンケート調査を実施したが、劇場利用者に対するサービスや専門的・技術的サービスの状況を評価できる十分な調査結果が得られておらず、この点については、今後の継続調査や情報収集が課題といえる。

(3) 劇場の経営状況に関する評価

- チケット販売、外部資金獲得の実績から、収入拡大に向けた取り組みは評価できる。
- 組織運営については、評価調査は未実施の状態で、調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。

(4) 劇場運営に伴う派生的な効果

- 2004年度は、劇場運営に伴う経済波及効果の試算を行った。
- その結果、劇場の運営管理、主催事業の最終需要は約12.4億円、主催事業の観客の消費支出は約2.9億円、それらの経済波及効果は20.6億円であり、北九州芸術劇場の運営は、相応の経済波及効果をもたらしていることが明かとなった。
- 貸館事業についても、同様の経済波及効果を生み出しているものと考えられるが、データ収集の制約から、今年度は参考値の試算にとどまった。
- パブリシティ効果については、開館年の昨年度よりは若干下回ったものの、新聞をはじめとした各種媒体への露出度は依然として高いといえる。
- パブリシティ効果の内、新聞掲載記事を広告宣伝費換算した金額は、約1.8億円であり、これは、市の事業に対する補助金1.2億円を大きく上回っている。

3. 今後の課題

本調査では、北九州芸術劇場の事業評価調査として、2003年度から以下のような調査を行ってきた。

- 観客アンケート調査(2003年8月の開館以来、全主催事業を対象)
- 学芸事業参加者へのアンケート調査、グループインタビュー
- 専門家による座談会(1年間の劇場運営の成果について)
- 劇場運営に伴う経済波及効果の試算、パブリシティ効果の金額換算

これらの調査は、劇場評価の基礎データとして今後も継続すべきだと考えられるが、さらに、幅広い視点から事業評価を行うためには、今後は次のような調査の実施も検討すべきであろう。

- 観客に対するグループインタビュー
- 一般市民に対するアンケート調査(劇場の利用経験者ではなく、一般市民の、劇場の認知度や運営方針の支持度など)
- 貸館利用者に対する満足度調査(2004年度に実施した施設利用に関するアンケート調査の充実)
- 安全管理や清掃・警備など、劇場運営の基礎的な環境整備の状況把握
- 組織の運営実態(内部スタッフへのインタビュー調査やディスカッションなど)

評価は評価自体が目的ではなく、PDCA サイクルに沿って、評価の結果を、現在の事業や運営の改善につなげていくことが重要である。そういう点で、次年度には、3年間の評価結果を、事業や運営の改善に反映させる仕組みについても、検討することが望ましいと考えられる。

図表5-1 事業評価の基本フレームに基づいた評価結果一覧

評価軸・評価大項目	評価小項目・評価指標(例示)と調査結果・評価データ	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">計画目標に対する評価</p>	<p style="text-align: center;">基本目標の達成度に関する調査結果</p>		
	<p>[創る] 北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していく。</p> <p>[2003年度]</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ファウスト」、「大砲の家」、「シアターラボ」の3事業を実施。「ファウスト」は世田谷パブリックシアターで、「大砲の家」は伊丹アイホールで、北九州芸術劇場プロデュースとしても公演。 「ファウスト」入場率:東京公演97%、北九州公演92% 「大砲の家」入場率:伊丹公演64%、北九州公演88% <p>[2004年度]</p> <ul style="list-style-type: none"> 「わたしの青い鳥」、「冒険王」、「シアターラボ」、「ルル〜破滅の微笑み〜」の4事業を実施。「ルル〜破滅の微笑み〜」は世田谷パブリックシアター、まつもと市民芸術館で、北九州芸術劇場プロデュースとしても公演。 <p>[2003→2004年度]</p> <ul style="list-style-type: none"> 当該運営方針に対する観客の支持率(94.4%→93.5%)○ 	<p>→</p> <ul style="list-style-type: none"> 独自の演劇作品の創造については、ある程度の目標が達成されたと考えられるが、“ものづくりの街”北九州のアピールや地域活性化については今後の課題。 この基本目標に関する観客の支持率は高く、継続が望まれる。 専門家へのインタビュー調査でも概ね高評価。 	<p>→</p>
	<p>[育つ] アウトリーチなど、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育つ劇場を目指す。</p> <p>[2003年度]</p> <ul style="list-style-type: none"> 表現教育、戯曲講座、俳優養成講座、バックステージツアー、コンテンポラリーダンスワークショップ、学校出前演劇ワークショップなど、多様な事業を実施。 参加者の満足度については未調査。 <p>[2004年度]</p> <ul style="list-style-type: none"> 参加者の講座やワークショップに対する総合満足層(97.5%、うち「たいへん満足」:56.1%)◎ 「たいへん満足」:講座・ワークショップの内容(62.6%)、講師(72.4%)、劇場係員の対応(63.4%)◎ アウトカム評価:「人間関係に広がり生まれた」(66.7%、82件)、「演劇やダンスに新たな興味がわいた」(65.0%、80件)、「劇場が身近になり、足を運ぶ回数が増えた」(56.9%、70件)、「より多くの公演を鑑賞したいと思った」(50.4%、62件)、「仕事や活動の幅、可能性が広がった」(43.1%)など。 <p>[2003→2004年度]</p> <ul style="list-style-type: none"> 当該運営方針に対する観客の支持率(93.1%→93.4%)○ 	<p>→</p> <ul style="list-style-type: none"> 多様で積極的な事業展開が評価できる。 学芸事業参加者の事業に対する満足度は極めて高い。 グループインタビュー調査でも、参加者に大きなインパクトを与えていることが明確となった(アウトカム)。 この基本目標に対する観客の支持率は高く、継続が望まれる。 	<p>→</p> <ul style="list-style-type: none"> 継続調査の実施。 一般市民向けアンケート調査の実施。 グループインタビュー調査の実施。 定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
<p>[観る] 舞台芸術の先進都市からエンターテインメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「阿国」、「ピーターパン」、「イッセー尾形のとまらない生活」、「レッツゴー忍法帖」、「リチャード三世」、「ユーリントウン」など、幅広い公演を実施。 公演事業の総入場者数は36,788人。 <p>[2004年度]</p> <ul style="list-style-type: none"> 「伝説の女優 Legends!」、「子午線の祀り」、「ロミオとジュリエット」、RSC「オセロー」、子どものためのシェイクスピア「ハムレット」、イッセー尾形の一人芝居、山海塾「ひびき」など、幅広い公演を実施。 公演事業の総入場者数は37,095人。 <p>[2003→2004年度]</p> <ul style="list-style-type: none"> 「公演内容」の満足層(95.6%→96.2%、うち「たいへん満足」59.9%→53.0%)◎ 「開場記念公演全体の内容」の満足層(88.5%)○→「年間ラインナップの満足層」(76.6%)△ 当該運営方針に対する観客の支持率:99.2%→99.2%(積極支持:88.5%→83.3%)○ 	<p>→</p> <ul style="list-style-type: none"> 昨年度に続き、公演内容に対する観客満足度が極めて高いことから、本目標の達成度は高いと評価できる。 ただし、プログラム全体に対する満足度は低下した。 この基本目標に対する観客の支持率も極めて高いことから、積極的に継続すべき。 専門家へのインタビュー調査でも概ね高評価。 	<p>→</p>	

評価軸・評価大項目	評価小項目・評価指標(例示)と調査結果・評価データ	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題	
劇場の運営状況に関する評価	【観客サービス】 劇場の観客に対して質の高いサービスが提供されているか。	[2003→2004年度] ● 広報・告知の方法と内容:「公演情報の入手しやすさ」満足層(64.9%)×→(73.3%)△(改善) ● チケット販売のしくみ:「チケットの予約・購入のしやすさ」満足層(53.1%)×→(72.9%)△(改善) ● 客席案内等のフロントサービスの内容と質:「劇場係員の対応」満足層(91.9%)◎→(97.3%)◎ ● 劇場ロビーにおける飲食・物販サービスの内容と質:「劇場ロビーの飲食サービス」満足層(73.2%)△→(77.6%)△(改善傾向) ● 劇場スタッフの対応(窓口、電話など):「電話予約やチケットカウンターの対応」の満足層(79.8%)△→(90.7%)○	● 昨年度、要改善項目であった、「広報・告知の方法と内容」、「チケット販売のしくみ」は、観客満足度からみるとかなり改善された(観客の慣れによる要因も大きいと考えられる)。 ● 改善の望まれる項目であった「劇場ロビーにおける飲食・物販サービス」、「劇場スタッフの対応(電話、窓口)」のうち、後者は満足層が9割を超えるまで改善されたが、前者は改善傾向が見られるもののさらなる改善が望まれる。 ● 昨年度から満足度の高かった「劇場係員の対応」は、さらに満足度が高くなり、ほぼ100%近い観客が満足している。	● 継続調査の実施。 ● 安全管理、清掃、警備等の実施状況。
	【劇場利用者サービス】 劇団や市民団体など利用者に適切なサービスが提供されているか。	[2003、2004年度] ● 貸館利用者の受付サービス:未調査 ● 楽屋等バックヤードのサービス:未調査 [2004年度] ● (貸館利用者調査)	● 貸館利用者調査は実施したが、評価に十分な調査に至っていない。	● グループインタビュー調査の実施 ● 設備、機器類のメンテナンスの実施状況。
	【専門的・技術的サービス】 劇場の専門的・技術的サービスの水準や提供状況は適切か。	[2003、2004年度] ● 舞台制作等に関する専門的なサービス:未調査 ● 劇場設備のメンテナンス状況:未調査 ● 劇場技術スタッフの対応:未調査 [2004年度] ● (貸館利用者調査)	● 貸館利用者調査は実施したが、評価に十分な調査に至っていない。	● グループインタビュー調査の実施 ● 設備、機器類のメンテナンスの実施状況。
	【その他】 その他、劇場の事業や運営は適切に行われているか。	[2003、2004年度] ● 事業評価への取り組み:事業評価調査を実施 ● アカウンタビリティへの取り組み:未調査	● 貸館利用者調査は実施したが、評価に十分な調査に至っていない。	● グループインタビュー調査の実施 ● 設備、機器類のメンテナンスの実施状況。
* アンケート調査結果については、◎、○、△、×の4段階評価とした。 ** 支持率、満足層の割合は、無回答を除いて算出した数値である。				
劇場の経営状況に関する評価	【事業収支】 事業収支の面で十分な経営努力が行われているか。	[2003→2004年度] ● 収入拡大に向けた取り組み:チケット販売努力:平均入場率(88.2%)→(88.7%)○ ● 外部資金の獲得(7,000万円、事業費の17.7%)→(6,700万円、事業費の19.9%)○ [2003、2004年度] ● 経費削減に向けた取り組み:未調査	● チケット販売、外部資金獲得の実績から、収入拡大に向けた取り組みは評価できる。	● 継続調査の実施。 ● 詳細調査の必要性の検討、実施。
	【組織運営】 適切なスタッフ体制や効率的な組織運営が行われているか。	[2003、2004年度] ● 組織体制の適切さ:未調査 ● 業務内容・ボリュームの適切さ:未調査 ● 意志決定の円滑さ:未調査	● 未調査のため評価保留	● 運営スタッフ等に対するインタビュー調査、業務実態に関する調査などの実施。
	【その他】 その他、経営面で適切な対応が行われているか。	● 効率的な運営に向けた取り組み:未調査	● 未調査のため評価保留	● 評価項目、評価指標等の検討。

評価軸・評価大項目	評価小項目・評価指標(例示)と調査結果・評価データ	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
[経済的効果] 劇場運営によってどのような経済的な効果が生み出されたか。	[2003年度] <ul style="list-style-type: none"> 経済波及効果:劇場の管理運営、公演事業等の最終需要は約12億円、経済波及効果は23億円程度(参考値) 観客の観劇前後の消費支出額は約1.5億円 [2004年度] <ul style="list-style-type: none"> 経済波及効果:劇場の運営管理、主催事業の最終需要は約12.4億円、経済波及効果は約17.7億円(産業連関表による計算値) 主催事業の観客の観劇前後の消費支出(交通費含む)は約2億円、経済波及効果は約2.9億円。 運営管理、主催事業、主催事業の観客の消費支出に伴う合計最終需要は約14.3億円、経済波及効果は約20.6億円 貸館事業、貸館観客の消費支出による最終需要は約8.8～10.9億円、経済波及効果は約11.7～14.6億円(参考値) 	<ul style="list-style-type: none"> 劇場の事業規模に応じた経済効果が発生。 観劇に伴う観客の消費活動も活発。 	<ul style="list-style-type: none"> 継続調査の実施、精度アップ(劇場管理運営費、事業費の振り分け、観客消費支出の精度アップ)。 所得増、雇用増、税収増の試算。 貸館に伴う経済波及効果の精度アップ(貸館事業者、貸館事業観客へのアンケート調査)。
[パブリシティ効果] 劇場事業によって、北九州市の広報面でどのような効果があったか。	[2003年度] <ul style="list-style-type: none"> シティプロモーション:新聞掲載件数378件(全国紙掲載含む)、うち180件は公演紹介・取材記事、劇評、劇場イベント紹介など イメージアップ:同上 劇場の認知度:同上 パブリシティ効果の規模:約2億1,000万円(180件の新聞記事のみ) [2004年度] <ul style="list-style-type: none"> シティプロモーション:新聞掲載件数327件(全国紙掲載含む)、うち163件は公演紹介・取材記事、劇評、劇場イベント紹介など イメージアップ:同上 劇場の認知度:同上 パブリシティ効果の規模:約1億7,700万円(163件の新聞記事のみ) 	<ul style="list-style-type: none"> 新聞をはじめとした各種媒体への露出度は高く、劇場運営に伴うパブリシティ効果は大きい。 新聞掲載記事だけで、市の事業補助金を上回る規模。 	<ul style="list-style-type: none"> 継続調査の実施。
[その他の派生的効果] 劇場運営に伴い、その他、どのような派生的効果があったか。			<ul style="list-style-type: none"> その他の派生効果の洗い出し、評価項目、評価指標等の検討。

劇場運営に伴う派生的効果に対する評価